

# 正法眼蔵

---

摩訶般若波羅蜜多に参ずる

金子勝俊

2016年9月

## 正法眼蔵第二摩訶般若波羅蜜

義雲頌著<sup>1</sup>

第二摩訶般若 照了綿密

智燈照徹解陰空、什麼處人居暗室

徧界不蔵誰敢疑、摩訶般若波羅蜜

(智燈照徹して陰空を解す、什麼の處

の人か暗室に居せん、徧界蔵さず誰

か敢えて疑わん、摩訶般若波羅蜜)

面山述贊<sup>2</sup>

第二摩訶般若 述云、摩訶梵言、

略有三義、大也多也勝也、是歎德之

辭、般若梵言、漢語智慧、智慧淺略、

般若深廣、是故古德多存梵言而用、

即觀照諸法實相之光明也、贊言 髑

髑識盡、眼睛豁開、是名般若、實鏡

非臺、諸相非相、即見如來、毘盧歡

喜、善哉善哉、徧界風光無展縮、都

歸五葉一華梅。(述して云わく、摩訶

は梵言、略して三義有り、大也多也勝

也、是歎德之辭なり、般若梵言、漢語

智慧、智慧は淺略、般若深廣、是故に

古德多く梵言を存して用ゆ、即ち諸法

實相觀照之光明なり、贊に言わく、髑

髑識盡きて、眼睛豁開す、是を般若と

名づく、實鏡臺にあらず、諸相非相、

即見如來、毘盧歡喜す、善哉善哉、

徧界の風光展縮無し、都て五葉一華

の梅に歸す

義雲禪師 (1253~1333) の要約、

第二、大いなる般若(智慧の極まり)、隅々まで照らしき  
って手ばかりなし。

智慧の光が隅々にまで照らされ、全てを顕わにする、光  
のとどかない暗がりに誰が居るだろうか。世界は剥き出し  
であり、それを誰が疑おう、大いなる般若(智慧の極まり)。

面山和尚 (1683~1769) の要約、

第二、大いなる般若(智慧)。

述べて説く、摩訶とは梵語(サンスクリット語)で、三つ  
の意味がある、大、多そして勝、これは褒めたたえた言葉  
である。般若は梵語(サンスクリット語)で、それを漢語で  
云えば智慧であり、智慧だと浅はかな意味合いになってしま  
うが梵語の発音のまま般若と言えば深い味わいになる。この  
故に昔から梵語をそのまま使っている。すなわちこの世に存  
するあらゆる事物はありのままに光り輝いているのである。

褒めたたえて言う、凡夫の識見を究め尽して真実を見る、  
黒目が大きく見開いている、これを般若(智慧)と名づける。  
綺麗に磨いた鏡といえども真実ではなく、あらゆる事物の  
ありのまま、あるいはうつろのまま、そこに如来を見る、  
毘盧遮那如来は歡喜し、良きことかな、世界の景色は伸  
び縮みなくありのまま、そしてあまねくゆきわたった  
仏道の根本が般若なのである。

## 正法眼蔵第二摩訶般若波羅蜜

### 摩訶般若波羅蜜<sup>3</sup>

觀自在菩薩<sup>4</sup>の行深般若波羅蜜多  
時は、渾身の照見五蘊皆空<sup>5</sup>なり。五  
蘊は色受想行識<sup>6</sup>なり、五枚の般若な  
り。照見これ般若なり。この宗旨の開  
演現成するにいはく、色即是空なり、  
空即是色なり、色是色なり、空即空な  
り。百草なり、万象なり。般若波羅蜜  
十二枚<sup>7</sup>、これ十二入<sup>8</sup>也。また十八<sup>9</sup>  
枚の般若あり、眼耳鼻舌身意、色声  
香味触法、および眼耳鼻舌身意識等  
なり。また四枚の般若あり、苦集滅道  
<sup>10</sup>なり。また六枚の般若あり、布施・  
淨戒・安忍・精進・静慮・般若<sup>11</sup>なり。  
また一枚の般若波羅蜜、而今現成せ  
り、阿耨多羅三藐三菩提<sup>12</sup>なり。また  
般若波羅蜜三枚あり、過去・現在・未  
来なり。また般若六枚あり、地水火風  
空識なり。また四枚の般若、よのつね  
におこなはる、行・住・坐・臥なり。

釈迦牟尼如来会中有一苾芻竊作  
是念、我応敬礼甚深般若波羅蜜多。  
此中雖無諸法生滅、而有戒蘊・定蘊・  
慧蘊・解脱蘊・解脱知見蘊施設可得、  
亦有預流果・一來果・不還果・阿羅漢  
果施設可得、亦有独覺菩提施設可  
得、亦有無上正等菩提施設可得、亦  
有仏法僧宝施設可得、亦有轉妙法  
輪・度有情類施設可得」

(釈迦牟尼如来の会中に一の苾芻

### 大いなる般若(智慧の極まり)

觀音菩薩が般若(智慧の極まり)の修行をしっかりと極められた時、この世界を形づくる五つの要素は全て空(うつろ)であると身をもって正しく理解されたのである。五つの要素とは物質と精神のハタラキの全てのことであつて五枚の般若である。正しく理解するものは般若である。この教えは次のように説かれる、すなわち形あるものは空(うつろ)であり、空は形あるものであり、形あるものは形あるものであり、空(うつろ)は空なのである。それはあちこちに生えている草であり、周囲にあるあらゆる事物である。般若(智慧の極まり)は十二枚あり、これは六根と六境とである。また十八枚の般若がある、すなわち眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根であり色境、声境、香境、味境、触境、法境および眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識等である。また四枚の般若がある、すなわち苦(四苦八苦の苦)、集(苦を集めた無明煩惱)、滅(苦しみを滅せられた涅槃)、そして道(涅槃を実現する修行)である。また六枚の般若がある、すなわち布施・淨戒・安忍・精進・静慮・般若である。また一枚の般若が今現れている、無上正等正覚すなわち絶対の眞実である。また般若は三枚あり、過去・現在・未来である。また般若に六枚あり、地・水・火・風・空・識である。また四枚の般若があり、生活の中で常に行われている、歩くこと、止まること、坐ること、臥する(寝る)ことである。

お釈迦様が開いていた会合の最中に、一人の出家僧が秘

あり、竊かに是の念をななく、「我れ甚  
深般若波羅蜜多を敬礼すべし。此の  
中に諸法の生滅無しと雖も、而も  
戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱知見  
蘊<sup>13</sup>の施設可得<sup>14</sup>有り、また預流果・  
一來果・不還果・阿羅漢果<sup>15</sup>の施設  
可得有り、また獨覺<sup>16</sup>菩提の施設可  
得有り、また無上正等菩提<sup>17</sup>の施設  
可得有り、また仏法僧宝の施設可得  
有り、また轉妙法輪・度有情類の施設  
可得有り)

仏知其念、告苾芻言、「如是、如  
是。甚深般若波羅蜜、微妙難測」

(仏、其の念を知して、苾芻に告げ  
て言く、「是の如し、是の如し。甚深般  
若波羅蜜は、微妙なり、難測なり」)

而今の「一苾芻」の「竊作念」は、  
「諸法」を「敬礼」するところに、「雖無  
生滅」の般若、これ敬礼なり。その正  
当敬礼時、ちなみに「施設可得」の  
般若現成せり。いはゆる「戒定慧」乃  
至「度有情類」等なり、これを無とい  
ふ。無の施設、かくのごとく可得なり。  
これ「甚深」「微妙難測」の般若波羅  
蜜なり。

天帝釈問具壽善現言、「大徳、若  
菩薩摩訶薩、欲学甚深般若波羅蜜  
多、当如何学」

(天帝釈、具壽善現に問うて言く、  
「大徳、若し菩薩摩訶薩、甚深般若波  
羅蜜多を学せんと欲はば、まさに  
如何が学すべき」)

善現答言、「憍尸迦、若菩薩摩訶  
薩、欲学甚深般若波羅蜜多、当如虚  
空学」。

かに次のような思いを抱いていた、「私は非常に深い般若  
(智慧の極まり)を尊敬礼拝すべきであると思います。この  
般若の世界にある有形無形のあらゆるものは不生であり  
不滅ですが、戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱知見蘊とい  
う最高の悟りを得た者が具える五つの功德を言い表した  
言葉(備え)があり、また預流果・一來果・不還果・阿羅漢  
果という(小乗仏教でいう)涅槃に至る修行の過程が言い  
表され得ており、また仏法僧という

三つの宝が言葉で表されており、また法輪を転じて生き  
とし生けるものを救済するために言い表された言葉(備  
え)があります。」

仏陀はその出家僧の思いを知って彼に告げた、「確かに  
その通りである。非常に深い般若(智慧の極まり)は趣き深  
く、測りがたいものである。」

今ここに説かれている一出家僧の秘かな思いというの  
は有形無形のあらゆるものに尊敬礼拝することであり、そ  
こに生滅はないと理解する智慧であり、この智慧に尊敬礼  
拝するのである。このまさに尊敬礼拝するその時、仮に言  
葉で表現すれば般若となる智慧の完成が現成する。いわゆ  
る先に述べた戒・定・慧から始まって「生きとし生けるも  
のの救済」等、これらを無自性の無という。真実の無は、  
言葉で表現すればこのようになる備え・調度なのである。  
これは非常に深くしてかつ趣き深く測りがたい般若(智慧  
の極まり)である。

帝釈天<sup>18</sup>が仏陀の十大弟子の一人である善現(須菩  
提)<sup>19</sup>に尋ねた、「大徳さん<sup>20</sup>、もし菩提を求めようとし  
ている人が非常に深い般若(智慧の極まり)を学ぼうとし  
たらどのように学んだらよいでしょうか。」

(善現答へて言く、「橋戸迦、もし菩薩摩訶薩、甚深般若波羅蜜多を學せんと欲はば、まさに虚空の如く學すべし」)

しかあれば、「學般若」これ「虚空」なり、「虚空」は「學般若」なり。

天帝釈、復白仏言、「世尊、若善男子善女人等、於此所說甚深般若波羅蜜多、受持讀誦、如理思惟、為他演說、我当云何而守護。唯願世尊、垂哀示教」

(天帝釈、また仏に白して言さく、「世尊、若し善男子善女人等、此の所說の甚深般若波羅蜜多に於て、受持讀誦し、如理思惟し、他の為に演說せんに、我れまさに、云何が守護すべき。ただ願はくは世尊、哀を垂れ示し教へまませ」)

爾時具壽善現、謂天帝釈言、「橋戸迦、汝見有法可守護不」。

(爾の時に具壽善現、天帝釈に謂つて言く、「橋戸迦、汝、法の守護すべき有るを見るや不や」)

天帝釈言、「不也、大徳、我不見有法是可守護」

(天帝釈言く、「不や、大徳、我れ法の是れ守護すべき有ることを見ず」)

善現言、「橋戸迦、若善男子善女人等、作如是說、甚深般若波羅蜜多、即為守護。若善男子善女人等、作如所說、甚深般若波羅蜜多、常不遠離。当知、一切人非人等、伺求其便、欲為損害、終不能得。橋戸迦、若欲守護、作如所說。甚深般若波羅蜜多、諸菩薩者無異、為欲守護虚空」

善現(須菩提)が答えた、「橋戸迦さん<sup>21</sup>、もし菩提を求めようとしている人が非常に深い般若(智慧の極まり)を學ぼうとするなら、まさに虚空であるかの如く學びなさい。」

ということは般若(智慧の極まり)を學ぶということは虚空そのものなのであり、虚空は般若を學ぶということなのである。

帝釈天はまた仏陀に向かつて言った、「世尊よ、もし心正しき信徒たちがここで世尊がお説きになられている非常に深い般若(智慧の極まり)を聞き唱え、その道理をよく思索し、他の人の為に説こうとしている時、私はどのようにそれを守護したらよいのでしょうか。世尊よ、お願いです、私に哀れみをかけ教えてください。」

その時、善現(須菩提)が帝釈天に向かつて言った、「橋戸迦さん、あなたは守護すべき何らかの真理なり法というものが実体としてあるとお考えですか。」

帝釈天が言った、「いいえ、大徳さん、私は守護すべき何らかの真理なり法が実体としてあるとは考えていません。」

善現が言った、「橋戸迦さん、もし心正しき信徒たちが世尊のように考えるのであれば、非常に深い般若(智慧の極まり)をすぐに守護すべきです。もし心正しき信徒たち

(善現言く、「憍尸迦、若し善男子善女人等、是の如くの説をなさば、甚深般若波羅蜜多、即守護すべし。若し善男子善女人等、所説の如くなさば、甚深般若波羅蜜多、常に遠離せず。まさに知るべし、一切人非人等、其の便を伺求して、損害を為さんと欲んに、終に得ること能はじ。憍尸迦、若し守護せんと欲はば、所説の如くなすべし。甚深般若波羅蜜多と、諸菩薩とは異なること無し、欲守護虚空と為す」) するべし、受持読誦、如理思惟、すなはち守護般若なり。欲守護は受持読誦等なり。

先師古仏云<sup>22</sup>、

渾身似口掛虚空、

不問東西南北風、

一等為他談般若。

滴丁東了滴丁東。

(先師古仏の云く、

渾身口に似て虚空に掛かり

東西南北の風を問はず、

一等他と般若を談ず。

滴丁東了滴丁東)

これ仏祖嫡々の談般若なり。渾身般若なり、渾他般若なり、渾自般若なり、渾東西南北般若なり。

釈迦牟尼仏言、「舍利子、是諸有情、於此般若波羅蜜多、応如仏住供養礼敬。思惟般若波羅蜜多、応如供養礼敬仏薄伽梵。所以者何。般若波羅蜜多、不異仏薄伽梵、仏薄伽梵、不異般若波羅蜜多。般若波羅蜜多、即是仏薄伽梵。仏薄伽梵、即是般若

が、その様に行動するのであれば、非常に深い般若(智慧の極まり)は常に傍にあり離れることは有りません。しっかりと理解してください、どのような悪人が心正しき信徒たちの思いを知って彼らを妨害しようとやって来ても結局は出来ませんよ。憍尸迦さん、もし般若(智慧の極まり)を守護しようと思うのであれば、その様にすべきです。非常に深い般若(智慧の極まり)と菩提を求める人とは異なることがなく、それは虚空を守護しようと欲することなのです。

しっかりと理解してください、教えを聞き唱え、その教えの道理を思索すること、それが即ち般若(智慧の極まり)を守護することなのです。守護しようと欲することは教えを聞き唱えることと同じことなのです。

我が師である天童如浄禅師のお言葉である；

風鈴全体が大きな口となって虚空に掛かり、

東西南北のどの風に対しても

共に般若(智慧を極まり)を説いている、

風鈴の音が、ていちんとんりゃんていちんとん。

これは釈迦牟尼仏から承伝された言葉で現わされた般若(智慧の極まり)である。全身が般若である、自他ともに全て般若である、東西南北全て般若である。

波羅蜜多。何以故。舍利子、一切如来正等覺、皆般若波羅蜜多得出現故。舍利子、一切菩薩摩訶薩・獨覺・阿羅漢・不還・一來・預流等、皆由般若波羅蜜多得出現故。舍利子、一切世間十善業道・四靜慮・四無色定・五神通、皆般若波羅蜜多得出現故」。

(釈迦牟尼仏の言く、「舍利子、是の諸の有情、此の般若波羅蜜多に於て、私の住したまふが如く供養し礼敬すべし。般若波羅蜜多を思惟すること、應に仏薄伽梵を供養し礼敬するが如くすべし。所以は何。般若波羅蜜多は仏薄伽梵に異ならず、仏薄伽梵は般若波羅蜜多に異ならず。般若波羅蜜多は即ち是れ仏薄伽梵なり。仏薄伽梵は即ち是れ般若波羅蜜多なり。何を以つての故に。舍利子、一切の如来正等覺は、皆般若波羅蜜多より出現することを得るが故に。舍利子、一切の菩薩摩訶薩<sup>23</sup>・獨覺<sup>24</sup>・阿羅漢<sup>25</sup>・不還<sup>26</sup>・一來<sup>27</sup>・預流<sup>28</sup>等、皆般若波羅蜜多によりて出現することを得るが故に。舍利子、一切世間<sup>29</sup>の十善業道<sup>30</sup>・四靜慮<sup>31</sup>・四無色定<sup>32</sup>・五神通<sup>33</sup>、皆般若波羅蜜多によりて出現することを得るが故に」

しかあればすなはち、仏薄伽梵は般若波羅蜜多なり、般若波羅蜜多は是諸法なり。この諸法は空相なり、不生不滅なり、不垢不淨、不増不減なり。この般若波羅蜜多の現成せるは仏薄伽梵の現成せるなり。問取すべし、參取すべし。供養礼敬する、これ仏薄伽梵に奉觀承事<sup>34</sup>するなり。奉觀承事の仏薄伽梵なり。

釈迦牟尼仏が言う、「舍利子よ、この世のあらゆる生きものは般若(智慧の極まり)に対して、仏陀がそこにいるかのごとく供養し礼をもって尊ぶべきである。般若(智慧の極まり)を思いめぐらす時はまさに世尊を供養し礼をもって尊ぶかのようにしなさい。その理由は何であるか。般若(智慧の極まり)は世尊に異ならず、世尊は般若(智慧の極まり)に異なる。般若(智慧の極まり)は即ち世尊である。世尊は即ち般若(智慧の極まり)である。何故か。舍利子よ、全ての如来は般若(智慧の極まり)から現われ出でているから。

何故にそう云えるのであろうか。

舍利子よ、一切の菩提を求める偉大な人・一人で悟る人・(小乗仏教でいう)涅槃に至る修行の過程にある人等一切の出世間の人は皆般若(智慧の極まり)によって現われ出でることが出来るが故に。

舍利子よ、一切世間の十の善業生活をする人、色界の4種の禪定にいる人、無色界の4種の禪定にいる人、5種の神通力を持つ人等一切の世間の人は皆般若(智慧の極まり)から現われ出でることが出来るが故に。

そうであるが故に世尊は般若(智慧の極まり)である、般若はこの世の有形無形の事物である。この事物は空の様相を示している、生ずることもなく滅することもなく、汚れもなく淨くもなく、増えもせず減もしない。この般若(智慧の極まり)が有るといことは世尊がそこに、目の前に現われ出でているということである。尋ねてみなさい、參じてみなさい。供養し礼を以つて尊ぶ、是は世尊に対して見え奉り、ご用を承る。見え奉り、ご用を承るのは他ならぬ世尊である。

正法眼蔵摩訶般若波羅蜜多第二

爾時天福元年夏安吾日在觀音導利院示衆

寛元二年甲辰春三月二十一日侍越宇吉峰精舎侍司書写之 懷讓

正法眼蔵 摩訶般若波羅蜜多第二

その時天福元年(1233年)夏安居の日に觀音導利院に在って衆に示す。

寛元二年(1244年)甲辰(きのえたつ)春三月二十一日越の国吉峰精舎侍者寮にあって之を書写す 懷讓(えじょう)

1 義雲(1253~1333)、寂円の法嗣、永平寺第5代の住持、が60巻本正法眼蔵各巻に著語を付け、大要を頌の形でまとめた要約。義雲の頌著。

2 面山瑞方(1683~1769)、95巻本のそれぞれの巻を“述云”と“贊云”としてまとめた要約、品目述贊。

3 摩訶; 大きいこと、偉大なこと。般若; 智慧、最高の真理を認識する知恵。波羅蜜; 完成、極まり、到彼岸。菩薩が行う彼岸に至る修行。

4 觀音菩薩。

5 五蘊は皆空なりと照見して。

6 色: 地水火風の4大。受: 外からの刺激を受け入れる作用、想: 受け入れる刺激の概念化されたもの、行: 移り行くこと、識: 分別するはたらき。五蘊は身体と精神のハタラクの全て

7 眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の六根は心的作用に働く器官。対象(六境)に応じた認識思惟の作用(六識)の其々のよりどころである器官。色境、声境、香境、味境、触境、法境の六境は六根に対する対象。

8 十二処とも、六根と六境のこと

9 六根と六境に眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六識(六根を抛り所とする認識の作用)を加える。

10 苦: 迷いのこの世は全てが苦(四苦八苦)、集: 苦の因は飽くことなく求める愛執(無明煩惱)、滅: その愛執の完全な絶滅が苦の滅した究極の理想郷であること(涅槃)、道: このような苦滅の境に趣くための八正道の正しい修行(正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定)

11 六波羅蜜: 布施(完全な恵、施し)・淨戒(教団の掟を完全に守ること)・安忍(完全な忍耐)・精進(完全な努力)・静慮(完全な心の統一)・般若(完全な智慧)

12 無上正等正覚

13 戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱知見蘊: 五分法身といわれ、一切の束縛から解放され、悟りの境地へと至る過程を示したもの。無漏清淨(煩惱を離れた状態)となる(戒)、空・無相・無願の三昧を成就し心が統一される(定)、正しく見、正しく知り(慧)、尽智・無生智および正見と相応する勝解を得、生死輪廻を解脱する(解脱)、尽智・無生智を得、涅槃に入ったことを自覚する(解脱知見)。

14 施設可得は大変訳にくい言葉である。本来虚空であるこの世のあらゆるものは仮のものであるにもかかわらず、実体があるかのように言葉によって用意され備えられている。その用意され備えられた言葉の枠組みが施設であり、それが現成し得ている(可得)。

15 四果: 阿羅漢に至る修行の4段階、預流果は三界の見惑を断ち終わって、無慮(煩惱を離れた状態)の聖者の流れに入り終わった段階・一來果は欲界の9種類の修惑の内の前6種類までを断ち終わった位・不還果は残りの3種類の修惑を断ち終わった位・阿羅漢果は一切の修惑を断ち尽くした位。

16 仏の教えを離れて一人で道を覚るもの。

17 仏の悟り、悟りの智慧。

18 梵天と共に仏教を守護する12天の一つ、天上界の王。天帝釈。

19 須菩提しゅぼだい(音訳)、具寿善現(意識): 釈迦の十大弟子の一人で、無諍第一、解空第一といわれている。

20 徳ある優れたお方よ、という呼びかけ

21 帝釈天が人間であった時の名前

22 宝慶記に風鈴の頌として、如浄禅師が「我れ天童老僧、你に眼有ることを許す」として道元の理解を褒めていることが載っている

23 衆生救済のために無上菩提を求めると大乗の修行者、未来に仏になる者。

24 縁覚とも訳し、仏の教えによらないで自力で悟りを開き利他行をしない聖者。

25 小乗仏教に於ける修道の階位、四果の最高位、最高の悟りを得たもの、応供とも。一切の見惑修惑を断ち尽くし長く涅槃に入って再び生死に流転しない位。

26 四果の第三果、欲界の修惑の九品のなかの残余の三品を断ち終わって再び欲界に還って来ない位。



- 
- <sup>27</sup> 四果の第二果、欲界の修惑に九品（九等類）あるうちの前の六品を断ち終わった聖者の位。  
<sup>28</sup> 四果の第一果、初果、見道において三界の見或を断ち終わって、まさに無漏の聖道の流れに入り終わった位。  
<sup>29</sup> これより前が出世間の人に対して、これより後が一般世間の人に対する行い。  
<sup>30</sup> 不殺、不盗、不邪淫、不妄語、不両舌、不悪口、不綺語、不貧、不瞋、不邪見の十善を行う生活。  
<sup>31</sup> 欲界の惑いを超えた色界の四禅定、初禅、二禅、三禅、四禅  
<sup>32</sup> 色界より上位に有る四つの禅定の世界で、空無辺处、識無辺处、無所有处、非想非非想处。  
<sup>33</sup> 天眼、天耳、他心、宿命、神足の五神通。  
<sup>34</sup> ご用事を受けまみえ奉る。

### 参考文献

神保如天・安藤文英校訂 正法眼蔵註解全書 正法眼蔵註解全書刊行会  
日本思想体系 道元 岩波書店  
正法眼蔵 (一)～(四) 岩波文庫  
水野弥穂子 原文対照 道元禅師全集第一巻 春秋社  
竹村牧男 正法眼蔵講義 大法輪閣  
酒井得元 正法眼蔵(真実の求め)摩訶般若の巻 大法輪閣  
西有穆山 正法眼蔵啓迪 大法輪閣  
弟子丸泰仙 正法眼蔵摩訶般若波羅蜜解釈 誠信書房  
鎌谷仙龍 正法眼蔵摩訶般若波羅蜜 仏教情報センター  
仏教学辞典 法蔵館  
大谷哲夫編 道元読み解き事典 柏書房  
菅沼晃編 道元辞典 東京堂出版

2016年9月24日

訳者 金子勝俊 東京都狛江市在住  
東京都世田谷区耕雲寺坐禅会会員